

703 判検事弁護士試験及第者謝恩会

〔法学新報〕第32巻5(365)号 大正11年5月4日

○判検事弁護士試験及第者謝恩会 去三月二十七日を以て大正十年度第二次判検事弁護士試験及第者の氏名発表せらるるや中央大学出身者は判検事に於て七名、弁護士に於て八十名何れも総数の約三分の一を占めたり殊に首席は判検事弁護士の何れも中央大学出身者たり弁護士試験に於て在学中登第せし者十二名の多数を出したるが如きは学風の質実剛健に伴ふ学生の勤勉なる証左にして他校の追従を許さざる所母校の爲め慶賀に堪えざるなり此名譽ある中央大学に学ひたる我等一堂に会して登第の喜を分ち且母校並に諸講師に対する謝恩の微意を表せんことを期し去る四月一日午後五時本郷燕楽軒に於て謝恩の宴を催したり定刻参会する者四十余名同窓の懐しさに古きも新しきも歡ひ談して和氣霽靄^(満)満堂春光流る六時過ぎ宴を開き進んで「デザートコース」に入るや野尻収君登第者一同を代表して謝恩の辞を述べ之に対して大学理事馬場愿治博士謝辞を述べられ尚謝辞に加へて我等の将来に關し社会の爲め母校の爲め懇懇諭す所あり次に片山義勝博士、林頼三郎博士、泉二新熊博士、三宅高

時、阿部文二郎、岩本勇次郎、草野豹一郎の諸講師は我等の将来に關して諄諄として訓諭せられ登第者側よりは今回議會を通過せる刑事訴訟法改正案の中心たる林博士に該改正案の著書を速かに公刊せられんことを要求するあり或は片山博士に其著株式會社法論及び會社法原論等を増刊せられんことを要求するあり或は試験委員たりし三宅、岩本兩講師に試験場に於ける委員としての態度を真似るあり或は試験場に於て諸講師の學校に於ける講義を其儘持ち出して追究せられしことを語るあり其状恰も愛児か父に対するか如く師弟の温情室内に溢れ続いて登第者各々順次に起立して氏名、生国、受験の動機、受験中の感想、將來の方針等を述べ經濟科出身者あり実業界より転じ來たりたるあり苦学力行の士又尠からず百人百態の経歴談は誠に興味深かりき理事佐藤正之氏の発声にて万歳を三唱し一同乾杯宴を撤したるは行人街路に絶ち大都會も正に睡に就かんとする頃なりき因に当日出席者來賓は馬場(愿)、佐藤兩理事、林、片山、泉二、三宅、岩本、阿部、草野の諸講師及び天野教務主任の諸氏にして登第者側にては野尻収、中尾義正、下地紹知、渡久山寛常、林貞夫、菊池邦三、早稻田逸郎、宮脇信介、林昌洙、安達幸衛、菅生健藏、齊藤岩次郎、阿比留兼吉、嶋名建、山本政喜、菊地養之輔、藤尾喜右衛門、柴田廣吉、奥島憲仁、三浦虎太、中田忠雄、後藤範之、宮崎直二、藤野衛、天野政次郎、中桐桂一、谷村清太郎、増子利末、成田幸一、花本菊次郎、森田愛次郎、平岡留藏の諸氏なりき(柴田生記)